

◆ 今週のコメント

- ・ 腸チフスの報告が1例(女性, 30歳代)あり, 本年初めての報告となっています。推定感染地域は国外(インド)で, 推定感染経路は経口感染です。(第15週追加分)
- ・ 侵襲性肺炎球菌感染症の報告が3例(男性 1例(60歳代), 女性 2例(60歳代))あります。本年の累積報告数は14例となっています。平成25年4月1日に五類感染症(全数把握感染症)に追加されて以降, 平成25年の累積報告数は15例でした。
- ・ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の定点当たり報告数は1.95(80例)で, 3週連続で増加しています。「感染症新法」が, 平成11年4月1日に施行されて以降, 同時期では最も多い報告数となっています。例年, 冬から夏前まで報告数が多い状態が続きますので, 今後の動向にご注意ください。
- ・ 突発性発しんの定点当たり報告数は0.51(21例)で, 2週連続で増加しています。過去5年平均値を大きく上回っており, 本年で最も多い報告数となっています。今後の動向にご注意ください。
- ・ 咽頭結膜熱の定点当たり報告数は0.44(18例)で, 前週(0.32)よりも増加しており, 過去5年平均値を大きく上回っています。例年, 6月頃から徐々に増加しはじめ, 7～8月に流行のピークを迎えます。昨年は, 6月に流行のピークを迎えた後いったん落ち着きましたが, 11月以降増加に転じ, 12月に最大の報告数となりました。本年に入ってから, 年末年始を含む平成26年第1週を除き, 過去5年平均値を上回る状態が続いており, さらに増加傾向にありますので, 動向にご注意ください。

◆ 今週のトピックス: < 感染性胃腸炎 >

感染性胃腸炎の定点当たり報告数は, 3週連続で増加して11.34(465例)となりました。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- ・ 二類: 結核 7例(肺結核 5例, その他結核 1例, 潜在性結核感染者 1例)うち喀痰塗抹陽性 2例
【1月以降の累積報告数 120例(肺結核 60例, その他結核 23例, 潜在性結核感染者 37例)うち喀痰塗抹陽性 29例】
- ・ 三類: 腸チフス 1例【1月以降の累積報告数 1例】(第15週追加分)
- ・ 五類: 侵襲性肺炎球菌感染症 3例【1月以降の累積報告数 14例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	2.32	158
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	11.34	465
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.95	80
	③ 突発性発しん	0.51	21
	④ 咽頭結膜熱	0.44	18
	⑤ 水痘	0.29	12
眼科	流行性角結膜炎	0.40	4

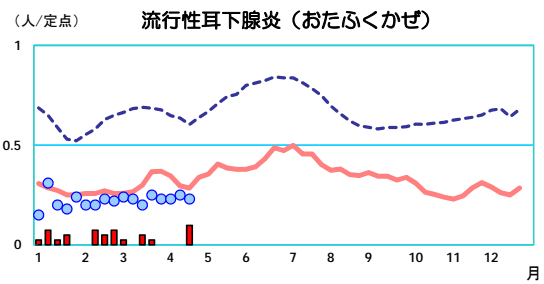
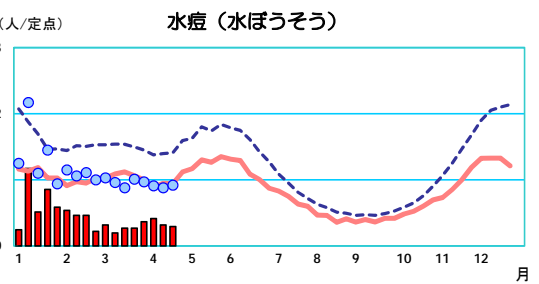
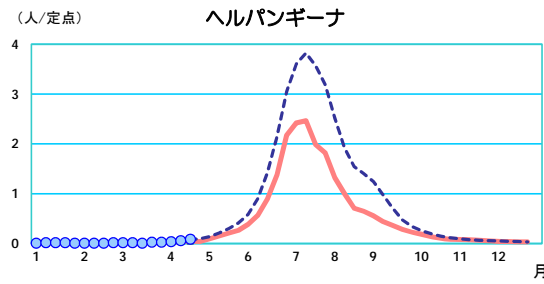
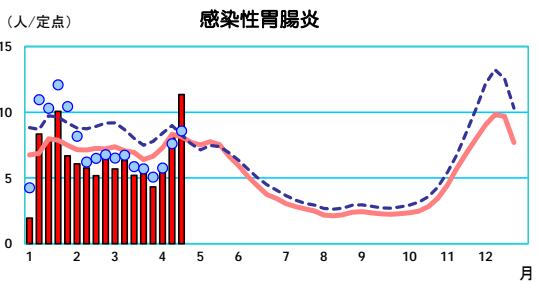
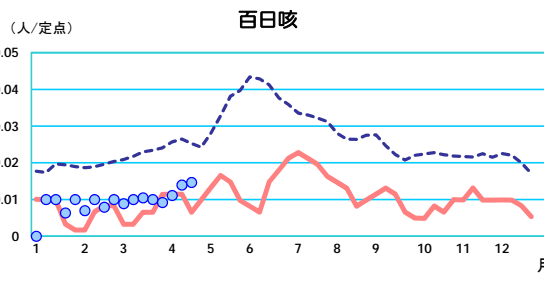
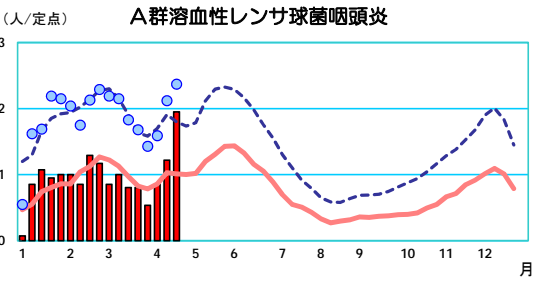
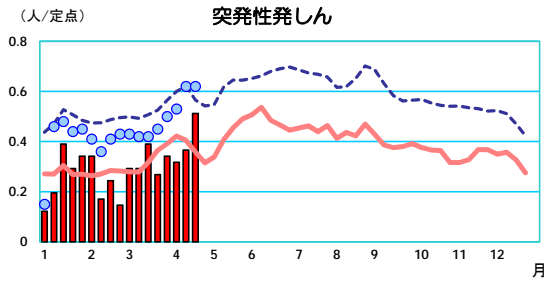
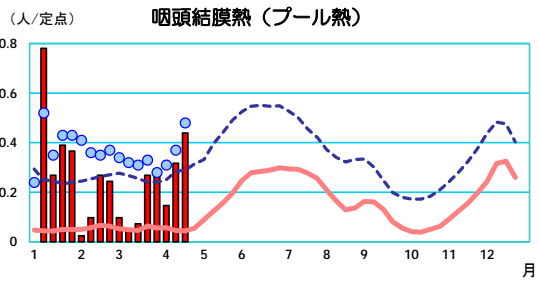
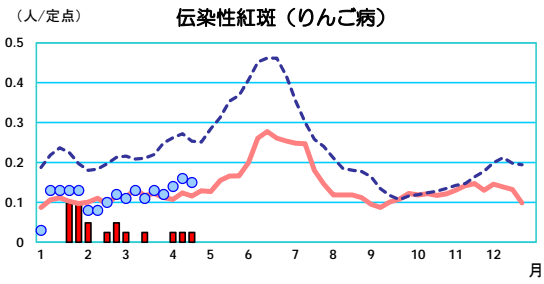
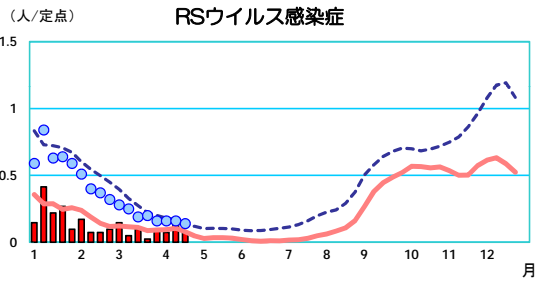
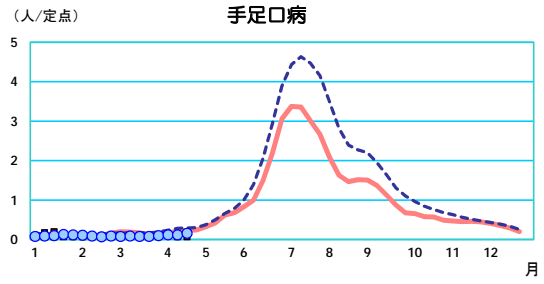
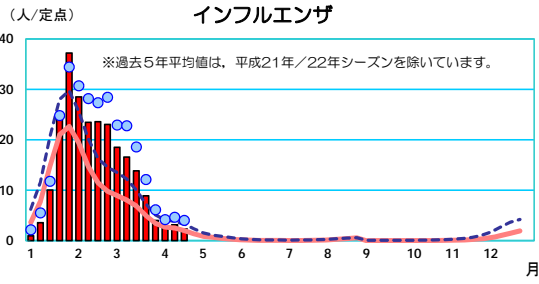
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: < 感染性胃腸炎 >

(注) 京都市のデータは, 平成26年5月1日現在の報告数で, 全国の還元データと若干異なる場合があります。
また, 本情報での患者数は, 届出医療機関所在地での集計で, 患者の住所を示すものではありません。

ヘルパンギーナ及び小児感染症の疾病別推移グラフ（平成26年）

■ 京都市_本年 — 京都市_過去5年平均値
● 全国_本年 - - - 全国_過去5年平均値



第17週(4月21日～4月27日)トピックス: <感染性胃腸炎>

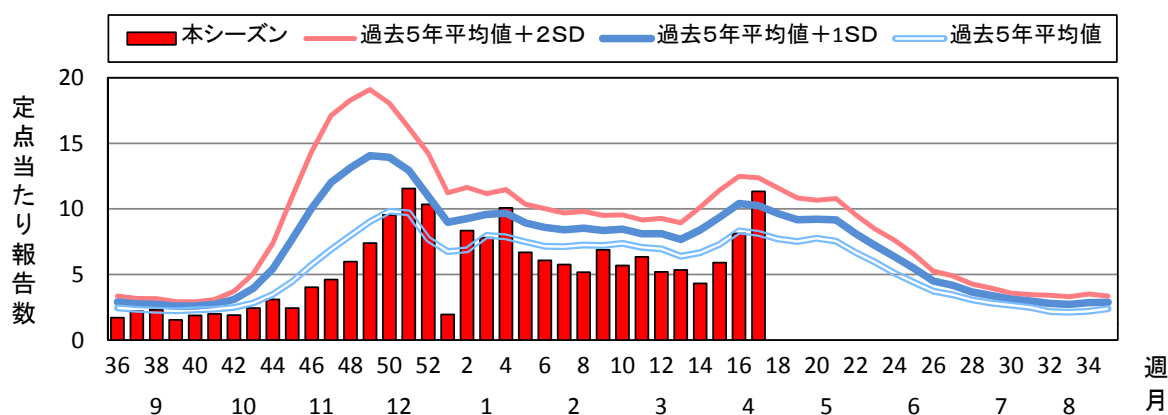
感染性胃腸炎の定点当たり報告数は、3週連続で増加して11.34(465例)となりました。特に、南区および西京区においては、警報開始基準値である「20」にせまる値となっています。過去5年間の平均と比較してみると、「過去5年平均値+SD(*)」を上回っています。これは、過去5年間の発生状況よりも多い傾向にあることを示しています。

感染性胃腸炎の発生は年間を通して発生していますが、11月から1月頃、そして3月から5月頃にかけて2回のピークがあります。全国のウイルス検出状況を見ると、冬季にノロウイルスを原因とする胃腸炎が多く、春先から5月にかけてはロタウイルスによる胃腸炎が多くなります。ロタウイルスは、乳幼児の嘔吐・下痢症の原因としても知られており、生後6箇月から2歳児に多く発生します。

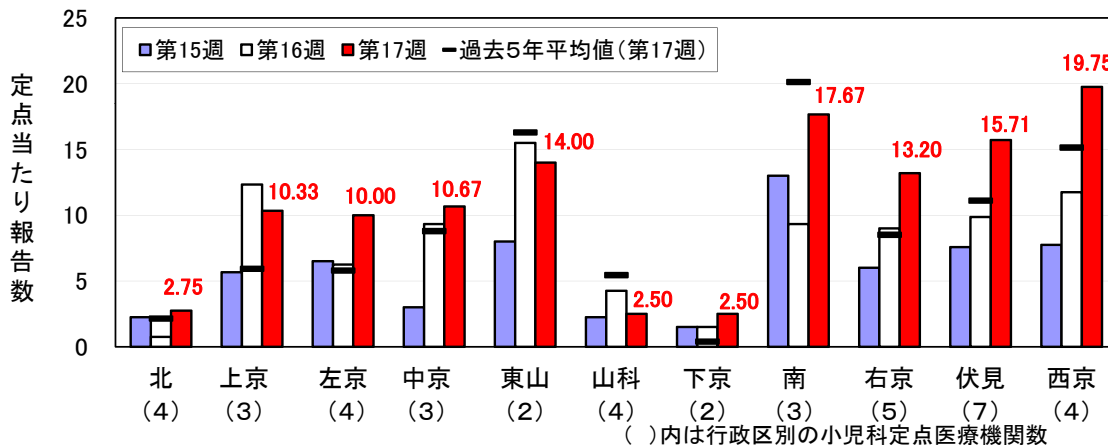
本市の年齢階級別では、1歳の報告が最も多く、次いで2歳および3歳となっており、5歳以下の年齢において報告が増加しています。また、ロタウイルスの検出が増加していることから、幼児の集団生活施設である保育所、幼稚園で集団発生の可能性もありますので注意が必要です。

(*)SDとは標準偏差のことで、データのばらつきの大きさを示す尺度です。下のグラフにおいて、赤の棒グラフ(本年の定点あたり報告数)がピンクのライン(過去5年平均値+2SD)を超えているときには、過去5年と比較してかなり多いことを意味しています。

本市の過去5年間との週別比較



行政区別定点あたり報告数の推移



年齢階級別定点あたり報告割合

